

林義勝

『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争』

(彩流社、2020年)

藤本 博

はじめに

アメリカ合衆国(以下、アメリカ)は、19世紀末のスペインとの戦争を機に、ハワイ併合、キューバの「保護国化」、フィリピン、プエルトリコ、グアム領有によって海外進出を果たし、「大陸帝国」から「海洋帝国」の道歩んだ。この意味で、19世紀末期から20世紀初頭の時期はアメリカ外交の歴史的転換期であった。本書は、この時期に関して過去20年間に執筆した諸論文を集大成して単著としてまとめられたもので、長年の研究蓄積をもとにした著者のライフワークの一つと言えるものである。

従来、アメリカとスペインとの戦争は「米西戦争」と呼称されてきた。本書のモチーフは、本書の題名が『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争』であることに集約されている。著者は、この呼称使用の理由として、「キューバとフィリピンでの戦闘やその結果も視野に入れることを鮮明にするため」だとしている(8頁)。この呼称は、アメリカとスペインの戦争以前にキューバとフィリピンではスペインの植民地支配に抵抗する独立戦争が展開されており、スペインとの戦争を機に、アメリカがキューバとフィリピンの独立革命を鎮圧するに至った歴史的経緯を重視する視点に基づいている。この意味で、本書の特徴は、この視点に立ってこの時期を「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」と把握し、キューバとフィリピンにおける独立革命・戦争の動向も組み込んで多角的・重層的に描くトランスナショナルな視点からのアメリカ外交史分析にある。

著者は日本においてこの時期に関して研究を蓄積してきた数少ないアメリカ外交史家の一人であり、上記の枠組みに立脚する重厚な研究書が刊行されたことを喜ぶたい。

以下、まず本書の構成を確認し、次に本書の意義について言及する。

1. 本書の構成

本書は、アメリカが1898年4月にスペインに対して宣戦布告をし、1902年7月にフィリピン・アメリカ戦争を終結させるまでの時期を対象とする。本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

第一章 スペインとの開戦

第二章 キューバの保護国化

第三章 アメリカの対フィリピン政策

第四章 フィリピン・アメリカ戦争の勃発と展開

第五章 反帝国主義運動と1900年の大統領選挙

結論

本書は、二つのパートから成る。第一に、第一～第四章において、「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」を包括的かつ詳細に考察し（第一章ではマッキンリー大統領の評価も含む）、第二に、第五章で反帝国主義者の言論活動について検証している。

評者として、本書の意義は下記①～③の三点にあると考える。以下、今後における研究の可能性も含め順に言及する（本書評2～4節）

- ① 「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」に関する包括的かつ詳細な実証的研究—キューバとフィリピンの独立革命・戦争とアメリカの交錯—
- ② 「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」における「人種」ファクターへの着眼—「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争の全体像の提示—
- ③ 反帝国主義者の積極的側面への注目

2. 「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」に関する包括的かつ詳細な実証的研究—キューバとフィリピンの独立革命・戦争とアメリカの交錯—

本書の意義の第一は、「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」の包括的かつ詳細な実証的研究の意味をもつことである。この点に関する本書の考察内容とその研究史的意味に関して詳しく見てみよう。

(1) 考察内容

著者は、「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」を考察するにあたって、キューバとフィリピン双方の独立革命・戦争とアメリカの交錯を軸に包括的かつ詳細に叙述している。キューバを対象とする第二章では、アメリカがスペインに対するキューバの独立戦争に対して人道主義的レトリックを掲げて介入し、最終的にキューバの「保護国」化に成功したことを明らかにする。他方フィリピンに関しては、第三章と第四章第一節で、革命軍指導者アギナルド（Emilio Aguinaldo）に焦点をあて、フィリピン・アメリカ戦争開始までのフィリピン革命政府とアメリカの交錯を検証し、続く第四章二節～四節では、フィリピン・アメリカ戦争の勃発とアメリカによるフィリピン革命軍鎮圧の経緯、その後のアメリカによる統治体制確立過程を描いている。著者はまた、キューバやフィリピンの革命指導者や独立運動の動向にも目配りして論じている（キューバでは親米派が革命軍の解体に協力し、フィリピンではスペインとの戦争の過程でアギナルドがフィリピン独立に対する米軍の支援を期待したことなど）。

著者は、以上の考察を通して、キューバとフィリピンへのアメリカの対応に関してその共通点が以下の三点にあるとの結論を導き出している(287頁)―①アメリカはスペインとの戦争の過程で、「両戦地の革命軍をアメリカ軍の都合のいいように利用した」。②「いずれの場合も解放軍の信頼を裏切り、単独でスペインとの休戦協定を結んだ。③スペインとの講和条約締結後、キューバを「保護国」化し、フィリピンでは「アジアで最初の共和国樹立の試みを武力で捻りつぶした」。

(2) 研究史的意味

本書から理解できるように、1960年代には、ウィリアムズ(W.A. Williams)やラフィーバー(W. LaFeber)などによって経済的膨張主義の特質を明らかにする研究が刊行された。他方で、キューバやフィリピンの独立革命・戦争を射程に入れた「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」の呼称は当時すでに提示されてはいたが(この呼称が現在定着しつつあることは、6-7頁を参照)、この枠組みに基づく実証研究は手薄であった。こうした実証研究が本格的に進展するのは1980年代以降のことである。ただ、これまでの実証研究はキューバないしはフィリピンを別個の対象として進展してきた。したがって、本書の研究史的意味は、1980年代以降の実証研究を幅広く渉猟して、キューバとフィリピン双方を対象に「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」を包括的かつ詳細に考察していることにある。

この研究史的意味に関し一つだけ指摘しておきたい。本書の所々で研究史に関する個別の言及はあるものの、キューバとフィリピンにおける独立革命・戦争とアメリカの交錯を射程に入れた先行研究の総括的なレビュー(全体としてどの論点を評価し、今後の研究課題は何か等)がないのが惜まれる。とくに後進の研究者がこの時期に関する研究を今後発展させるためにもこの点について言及してほしかった。

3. 「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」における「人種」ファクターへの着眼——「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争の全体像の提示——

本書の意義の第二は、「人種」ファクターに着眼して「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」の特質を紐解き、とくに「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争[米比戦争、比米戦争]の全体像を浮き彫りにしている点にある。アメリカの政策がキューバ人とフィリピン人を劣等視する「人種主義的優越性」のレトリックで正当化され、中でも1999年2月に勃発したフィリピン・アメリカ戦争では戦争目的が人種差別的言葉で正当化されて米軍による残虐行為が行われたことを著者は強調している。

(1) 「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争の全体像への示唆

著者は、以下の三点に注目して「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争の全体像を描いている(162-172頁)―①アメリカは、「住民の中から親アメリカ派を取り込み、抵抗派には武力を行使して制圧し、アメと鞭を使い分けながら」その利益を追求した。②米兵士がフィリピン人を「ニガー niggers」と呼ぶなど人種的優越意識に基づいて米軍によ

る虐殺行為、強制収容政策、「水責め」の拷問が行われた。そしてこの戦争は、アメリカがフィリピン革命軍のゲリラ戦を劣等人種による「野蛮な戦術」と認識し、「文明国による戦争で見られる一定の歯止めの対象にならないと考え…人種殲滅戦争の様相を呈した」。また米軍指揮官の中には先住民諸部族の軍事制圧を経験した人が多く、殲滅作戦採用を当然視した。③フィリピンにおける米軍の行為に対しては米国内で反帝国主義者が問題にしたが、「文明化が不十分な」フィリピン人に「法と秩序をもたらす努力をしている」との主張がその免罪符として使われた。

「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争の特質については、クレーマー (Paul A. Kramer) などによる近年の研究¹⁾ですでに論究され、著者はこの先行研究を踏襲して上記の諸論点をまとめている。管見の限り、日本では、「人種戦争」としてのフィリピン・アメリカ戦争に関し簡潔に言及した著作²⁾はあるものの、全体像を詳述する研究書はこれまでになかった。この点で、本書は貴重である。

フィリピン・アメリカ戦争を語る場合、広く歴史のかつ横断的文脈の中でも把握することが望まれる。本書にはこの点について一部言及があるだけであり、以下、歴史のかつ横断的文脈の中でフィリピン・アメリカ戦争を位置づける論点と関連文献を紹介し、「アメリカ帝国」史研究の可能性について評者として述べておきたい。

(2)「フィリピン・アメリカ戦争」の歴史的・横断的文脈と「アメリカ帝国」史研究

二点を指摘しておく。一つは、対先住民征服戦争から第二次世界大戦期の日米戦争、ベトナム戦争、イラク戦争に至る「アメリカ帝国」の戦争史の中にフィリピン・アメリカ戦争を位置づける視点が提示されていることである。³⁾ 「人種優越意識」を背景とするフィリピン・アメリカ戦争における米軍の残虐行為は反帝国主義者が当時批判したものの、その後、「世界帝国」の道を歩む過程で米国内においてこの戦争の記憶は忘却されていく。このことが再び注目を浴びるのは、半世紀以上後のベトナム戦争批判の中でアメリカのベトナム軍事介入が「アメリカ帝国」の歴史的帰結として理解される1970年前後のことである。ソンミ村虐殺 (Son My [My Lai] Massacre, 1968年3月) に象徴されるベトナム戦争下における米軍の残虐行為がアメリカ史上「逸脱」ではなく、フィリピン・アメリカ戦争における米軍の行為にその原型があると指摘されたのである。⁴⁾ 1970年前後にはまた、ベ

¹⁾ Paul A. Kramer, *The Blood of Government: Race, Empire, the United States & the Philippines* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2006).

クレーマーには以下の関連論考もある。Paul A. Kramer, “Race-Making and Colonial Violence in the U.S. Empire: The Philippine-American War as Race War,” *Diplomatic History* 30, no.2 (April 2006), 169–210.

²⁾ 例えば、油井大三郎『好戦の共和国 アメリカ』(岩波新書、2008年)、109–110頁。

³⁾ この点、伊藤裕子「アメリカ・スペイン・フィリピン戦争(1898年～1902年)」佐々木卓也編『ハンドブック アメリカ外交史』(ミネルヴァ書房、2011年)、45頁から示唆を受けた。

⁴⁾ 例えば、Stuart C. Miller, “Our Mylai of 1900: Americans in the Philippine Insurrection,” *Transaction* 7, no.9 (September 1970), 19–28; Luzviminda Francisco, “The First Vietnam: The U.S.-Philippine War of 1899,” *The Bulletin of Concerned Asian Scholars* 5, no. 4 (December 1973), 2–16がある

トナムにおける米軍の軍事行動が対先住民征服戦争の文脈でも把握され、連動してフィリピン・アメリカ戦争と対先住民征服戦争との類似性が語られ始めた。⁵⁾

以上のことから、フィリピン・アメリカ戦争を歴史的な文脈の中に位置づけることで、「アメリカ式戦争」(American Way of War) やそれを支える「人種差別意識」・「帝国意識」・「アメリカ例外主義」の連続性とその変容に注目して「アメリカ帝国」の歴史的特質を考察する研究が切り開かれていると言える。⁶⁾

第二に、フィリピン・アメリカ戦争をめぐる同時代史の横断的な側面の関して言えば、フィリピン人研究者による研究も組み込みフィリピン・アメリカ戦争に関する米比双方の歴史像⁷⁾ や戦争終結後におけるフィリピンにおけるアメリカ植民地統治を射程に入れた研究⁸⁾ に見られるように、トランスナショナルな視点も含む「アメリカ帝国」の文化・社会史研究が進展している。⁹⁾ また、19世紀末から20世紀初頭の時期をイギリス帝国などとの「比較帝国史」の視点からグローバル・ヒストリーとして描く視座も提起されている点も注目に値する。¹⁰⁾

⁵⁾ この点に関する研究文献は、本書第4章註86を参照。対先住民征服戦争・フィリピン・アメリカ戦争・ベトナム戦争の相互の類似性に関しては、白井洋子『ベトナム戦争のアメリカ』(刀水書房、2006年)、83-120頁を参照。

⁶⁾ この歴史的視点からの代表的研究として、ジョン・ダワーの著作 *Cultures of War: Pearl Harbor: Hiroshima: 9-11: Iraq* (New York: W. W. Norton, 2010) がある(三浦陽一監訳/田代泰子・藤本博・三浦俊章訳『戦争の文化——パールハーバー・ヒロシマ・9.11(上・下)』(岩波書店、2021年刊行予定))。この著作でダワーは、米比戦争にも言及し、この戦争でフィリピン人の蔑称として米兵の間で使用された「ニガー」の言葉がイラク戦争でも「サンド(砂漠の)・ニガー sand niggers」と形を変えて使用され、人種偏見が共通して見られること、そして米比戦争に始まってイラク戦争に至る海外における「アメリカの戦争」の共通点として、どの戦争においても米兵の死者をはるかに凌駕する現地民間人が殺害されていることを指摘している。Ibid., 78-82. 関連して付言すれば、米比戦争で「ニガー」とともに使用された「グーク gook」がベトナム戦争期にベトナム人を蔑視する言葉として広まったが、「ホワイトネス」研究で有名なローデガー(David R. Roediger)は、第二次世界大戦期や朝鮮戦争時においてもこの言葉が使用されたと指摘している。David R. Roediger, “Gook: The Short History of an Americanism,” in Roediger, *Towards the Abolition of Whiteness* (New York: Verso, 1994), 117-20.

⁷⁾ 中野聡『歴史経験としてのアメリカ帝国——米比関係史の群像』(岩波書店、2007年)。

⁸⁾ 岡田泰平『「恩恵の論理」と植民地——アメリカ植民地期フィリピンの教育とその遺制』(法政大学出版局、2014年)。岡田氏は同書(11-14頁)において、「アメリカ帝国主義研究と『文化論的転回』(‘Cultural Turn’)」の見出しで、関連研究状況に言及している。

⁹⁾ 林義勝氏も関連文献に言及するように(第4章註90)、黒人の他、ジェンダー、「男性性(男らしさ)」など当時のアメリカの社会状況と関連させる研究も進展している。岡山裕「第3章 再建と金メッキ時代」有賀夏紀・紀平英作、油井大三郎編『アメリカ史研究入門』(山川出版社、2009年)、85-87頁も参照。

¹⁰⁾ この点、Paul A. Kramer, “Power and Connection: Imperial Histories of the United States in the World,” *American Historical Review* 116, no. 5 (December 2011), 1348-93を参照。

4. 反帝国主義者の積極的側面への注目

本書の三点目の意義は、従来、反帝国主義者も海外市場の必要性を否定しない膨張主義者であることが強調されてきたのに対して、この時期の反帝国主義運動の積極面に注目していることである。以下、本書第五章で対象とする反帝国主義者に関する著者の理解をまず述べ、次いでこの点に関連して今後の研究の可能性について言及する。

(1) 反帝国主義者に関する著者の理解

当時の積極的な帝国主義批判の論者として作家のマーク・トウェンなどが従来注目されてきたが、著者は、アトキンソン (Edward Atkinson)、シュルツ (Carl Schurz)、ゴンパーズ (Samuel Gompers) の他、フィリピン人ロペス (Sixto López) に焦点をあて、反帝国主義者の言論活動の積極面について検討している。反帝国主義者の積極面に注目する著者の論点に関して興味深く読んだのは次の二つである。

第一に、反帝国主義者たちの積極面の一端をこう結論づけていることである—反帝国主義者の一部が世界におけるアメリカの経済的優位に言及し、人種的偏見を抱いていた面はあったものの、「反帝国主義者たちは、…海外領土の領有がアメリカの伝統的外交政策から逸脱していること、それがアメリカの民主主義の諸原則（被治者の合意による統治など）に反する行為であることなどをアメリカ国民に訴えてきた。直ちにその結果が出てこないにしろ、アメリカのあるべき姿を記した理念である独立宣言や連邦憲法を根拠に、マッキンリー政権の海外領土保有を批判する行為そのものが評価されてしかるべきだろう」(282頁)。

第二に、フィリピン人ロペスの言論活動に着眼し、反帝国主義者がロペスの言論活動を支援した点にも反帝国主義者の積極面が見られると強調している点である（第五章第五節）。ロペスは、1898年9月にアギナルドが派遣した使節団団長アゴンシリョ (Felipe Agoncillo) の秘書としてワシントンに同行し、その後、1900年10月にニューイングランド反帝国主義連盟役員ウォーレン (Fisk Warren) の招きでアメリカを再訪した人物である。本書では、ロペスがアメリカの建国理念である共和政原則にフィリピン領有は反するとアメリカ市民に訴え、そして反帝国主義者の支援がロペスにとって米国内の活動に大きな助けになったことを明らかにしている。

著者によれば、ロペスに関しては従来断片的にしか言及されず、邦語文献もないとのことである。この点で本書は、独立を求めアメリカのフィリピン領有を批判するフィリピン人に対する反帝国主義者の支援に注目してフィリピン人との連帯の側面に光をあて、反帝国主義者に関してトランスナショナルな側面から考察する新たな視点を提示する点で示唆的である。

ただ、本章では、ロペスに対する反帝国主義者の支援活動が全体として反帝国主義者の間やアメリカ世論にどう影響したのかに関しては必ずしも明らかでない。

(2) トランスナショナルな視点からの歴史的かつ同時代的な「反帝国主義」(運動) 研究の可能性

著者は、反帝国主義者の歴史的意義が、「歴史の転換点に立った時に、理念に立ち返って、アメリカ社会に向かって将来起こりうる問題を想定して、その進路に注意を喚起する役割

を担った」ことにあると強調する(289頁)。評者は、この指摘は示唆的と考えるが、著者はこの評価が今後の研究にどのような意味をもつかに関しては言及していない。本書第5章註196に記載の反帝国主義運動に関する近年の研究諸文献を一瞥すると、19世紀末から20世紀初頭の反帝国主義運動を含め「反帝国主義」に関して、時間と場所を超えてのトランスナショナルな視点からの歴史的かつ同時代的な研究の可能性が切り開かれていると評者として考えており、この点について簡潔ながら述べておく。

「歴史的」側面について言えば、著者の論点は、アメリカの建国理念が国内外において帝国主義・植民地主義批判の起源となっていることに注目する歴史観とつながる。¹¹⁾ 例えば被植民地地域で民族自決を主張するうえでアメリカ独立宣言がその精神的支柱になったことは、その後20世紀を通して見られる現象であり、その象徴的事例として、ベトナム独立の父、ホー・チ・ミン(Ho Chi Minh)が1945年9月2日のベトナム独立宣言の冒頭にアメリカ独立宣言を引用し、フランスによる再植民地化阻止のために、アメリカをはじめ国際社会の支援を呼びかけたことを想起できる。

「同時代的」側面では、アメリカの反帝国主義者の一部がその建国理念への着眼のみならず、「イギリス帝国」の植民地の状況にも注目して国際的視点からも帝国主義批判を行ったことが近年の研究で明らかにされている。¹²⁾

おわりに

著者が本書冒頭で言及しているように、日本では、「米西戦争」期の先駆的研究者である高橋章氏が約半世紀前の1970年代前半に「アメリカ＝フィリピン＝キューバ＝スペイン戦争」の呼称のもとで、「米西戦争」を「キューバおよびフィリピンの独立戦争を不可欠な要素として含む四極戦争」と把握し、「帝国主義戦争と民族解放戦争の歴史的交錯の究明を通して」この戦争の意味を明らかにすることを提唱した。¹³⁾ 本書は、とくに1980年代から近年に至る関連先行研究を幅広く渉猟し、重厚な実証研究として高橋氏のこの提唱を实らせたもので、「スペイン・アメリカ・フィリピン・キューバ戦争」ならびにその歴史の意味に関して包括的かつ詳細に論じた貴重な著作として位置づけることができる。

本書はアメリカ外交(「アメリカの戦争」)の対象であるアメリカ以外の地域の動向を組み込むトランスナショナルな視点からのアメリカ外交史(「アメリカ帝国」史)研究の可能性を示唆するものでもあり、本書がこの時期を専門とする研究者のみならず、広く歴史に関心をもつ研究者・一般読者に長く読み継がれることを期待したい。

¹¹⁾ この点は、イアン・ティレル、ジェイ・セクストン編、藤本茂生・坂本季詩雄・山倉明弘訳『アメリカ「帝国」の中の反帝国主義——トランスナショナルな視点からの米国史』(明石書店、2018年)、21頁を参照。原書名は、Ian Tyrrell and Jay Sexton, eds., *Empire's Twin: U.S. Anti-imperialism from the Founding Era to the Age of Terrorism* (Ithaca: Cornell University Press, 2015).

¹²⁾ 例えば、M. Patrick Cullinane, “Transatlantic Dimensions of the American Anti-imperialist Movement, 1899-1909,” *Journal of Transatlantic Studies* 8, no.4 (December 2010), 301-314.

¹³⁾ 清水知久・高橋章・富田虎男『アメリカ史研究入門』(山川出版社、1974年)、218頁。